

報告

## 2006年度徳島大学全学FD推進プログラムの実施報告

曾田紘二、廣渡修一、森田秀芳、宮田政徳、川野卓二、神藤貴昭  
(徳島大学 大学開放実践センター)

### 1. はじめに

本年度は、第2期全学FD推進プログラム(3ヵ年)の2年目である。前年度に引き続いてFD基礎プログラム、FDリーダーワークショップ、授業コンサルテーション、FDラウンドテーブル及び大学教育カンファレンスからなるプログラムを実施し、また実施を予定している。

初任者研修としての基礎プログラム及び授業コンサルテーション、ファシリテーター養成プログラムとしてのリーダーワークショップ、話題提供者を囲む懇談の場としてのラウンドテーブル、特色ある教育実践発表の場としての大学教育カンファレンスという位置づけによって、各プログラムの役割が一層明確になり、体系的が高まった。

これらのプログラムは、アンケート結果及び授業コンサルテーション等における状況から見て、概ね所期の成果を挙げたと言える。しかしその一方で、FDの日常化という側面に関しては、前年度同様実現にはほど遠いと言わざるを得ない。相変わらず参加者の少なさが続いている。こうした問題は、教員のFDに対する抵抗感が強い中で、明確なインセンティブも強制力もないまま実施することのもつ限界を示している。2008年度にも実施が予想されている大学教員の研修義務化によって事態が変わることを期待する。

小さいながら効果の大きいインセンティブとして、米国ではFDプログラム実施の際、軽食と飲み物が出されると言うことである。些細なことのようにだが、このような配慮によって親密でリラックスした雰囲気醸し出されることが考えられる。義務化という強制力と同時に、このような場づくりも大事であり、われわれの場合飲食費に予算支

出ができないのが残念である。また、リーダーワークショップのように、全学FDワークの中で学部FDのプログラムを作ってしまうというような、直接的実効的有用性をもたせるようにプログラム内容を工夫することも大事である。これらの点を工夫しながら、何より重要なのは継続させて行くことであるということは言うまでもない。

今年度は学務系事務職員の研修も同じ会場で並行して実施した。大学の教育を構成するスタッフが、教員、学生、事務職員の3者であることを考えれば、これは徳島大学の教育環境改善にとって画期的な一歩だと考える。来年度の課題としては、FD・SDの協働が実質的なものになるようプログラムを組むことが特に重要である。

### 2. FD基礎プログラム

ここでは、企業等から採用、または助手からの昇任によって、新たに徳島大学で授業を担当されることになった教員を対象者として実施した、「FD基礎プログラム」について報告する。

#### a. ねらい

今年度のこのプログラムは次の4点を目標に実施した。

- ①徳島大学全学FD活動の理念と活動計画を理解する。
- ②授業を計画し、実施し、評価する方法を体得する。
- ③授業研究の仕方を理解し、実践できるようになる。
- ④FDの共同実践者として仲間づくりができる。

#### b. 概要

■開催期日

2006年6月11日(土)

午前8時30分徳島大学出発

2006年6月12日(日)

午後5時20分徳島大学解散

■会場

独立行政法人「国立淡路青少年交流の家」

(兵庫県南あわじ市阿万塩屋町 757-39)

■対象者

企業等からの採用者及び助手からの昇任者。

参加者は以下の通りである。学部別に見ると、総合科学部1名、医学部2名、薬学部2名、工学部3名、合計8名である。

氏名	所属
西山 賢一	総合科学部
本田 浩仁	医学部
工藤 英治	医学部
植野 哲	薬学部
水口 博之	薬学部
藪谷 智規	工学部
柘植 覚	工学部
高橋 浩樹	工学部

■運営メンバー

大学開放実践センター長の他、大学開放実践センター教員6名、計7名で運営した。

■内容

2日間にわたって以下のプログラムを実施した。

2006年度FD基礎プログラム日程

第1日(2006年6月10日・土曜日)

9:30 国立淡路青年の家に到着・記念写真撮影

時刻	内容	講師・担当者	場所
9:30-10:00	・鍵の受け渡し、部屋の確認		特別第1研修室
10:00-10:30	(1)オリエンテーション ・徳島大学とFD、SDへの期待、新任教員への期待 ・研修のねらいと意義 ・進め方とスタッフ紹介	副学長(教育担当) 川上 博 大学開放実践センター長 曾田紘二 (進行) 宮田政徳 神藤貴昭	特別第1研修室

氏名	所属
曾田 紘二	大学開放実践センター長
廣渡 修一	大学開放実践センター
森田 秀芳	大学開放実践センター
宮田 政徳	大学開放実践センター
川野 卓二	大学開放実践センター
神藤 貴明	大学開放実践センター
奈良 理恵	大学開放実践センター

■特別オブザーバー

氏名	所属
中條 信義	歯学部

■学外講師

氏名	所属
大山 泰宏	京都大学
佐藤 浩章	愛媛大学

■事務局

氏名	職名
井上 直志	学務課長
安藤 松太郎	学務課課長補佐
三好 信幸	学務課総務係長
石井 清貴	学務課教育企画係長

大学教育研究ジャーナル第4号(2007)

10:30-11:00	(2)アイスブレイキング	川野卓二	特別第1研修室
11:00-11:45	(3)WS「良い授業とは」 ・学生から見た良い授業・悪い授業 (学生アンケートの分析) ・グループ別発表	宮田政徳	特別第1研修室
11:45-13:00	昼食(11:50-12:15) 休憩		食堂
13:00-13:30	(4)講義「講義の仕方・話し方・展開の仕方」	川野卓二	特別第1研修室
13:30-14:15	(5)講義「授業の計画から実施まで」	神藤貴昭	特別第1研修室
14:15-14:30	コーヒブレイク		
14:30-18:00	(6)WS=「ミニ授業の計画と準備」 ・演習課題①(A4で1枚のシラバスを作成) ・演習課題② (各自A4で1枚の授業計画書を作成) ・演習課題③ 教材の作成 (パワーポイントでできるだけ6枚以内)	センター教員全員	特別第1研修室 第4・第5研修室
18:00-19:00	夕食(18:30~19:00) 風呂他(入浴時間16:00~22:00)		食堂・浴室
19:00-20:00	自由時間(※各グループのリーダーは19:30~ 20:00の間に森田秀芳先生との打ち合わせ)		特別第1研修室
20:00-21:00	交流会	宮田政徳	特別第1研修室

22:00 消灯

第2日(2006年6月11日・日曜日)

時刻	内容	講師・担当者	場所
7:10-7:20	朝の集い		つどいの広場
7:30-8:30	朝食 掃除(8:25点検・退室)		食堂・宿泊室
8:30-9:20	授業計画書・教材の印刷(8:30までにスタッフ に提出) (7)WS=演習「ミニ授業のリハーサル」	センター教員全員	特別第1研修室
9:20-11:00	(8)演習「ミニ授業」発表会(前半) ●情報班A-1、A-2によるミニ授業 ●環境班C-1、C-2によるミニ授業	森田秀芳 神藤貴昭	特別第1研修室
11:00-12:00	(9)講演「学生を「理解」するということは」 (終了後、先生への質問カード記入)	大山泰宏 (京都大学)	特別第1研修室
12:00-13:00	昼食(12:15~12:40) 休憩		食堂
13:00-13:40	FDリーダー・SDとの共有 大山先生からの応 答10分、FDリーダー10分発表、SD10分 発表、10分討議		特別第1研修室

13:40-15:20	(10)演習「ミニ授業」発表会(後半) ●情報班B-1、B-2によるミニ授業 ●環境班D-1、D-2によるミニ授業	廣渡修一 神藤貴昭	特別第1研修室
15:20-15:50	(11)プログラムのまとめ ・修了証書授与 ・アンケート ・おわりの言葉	副学長(教育担当) 川上博 大学開放実践センター長 曾田紘二 (進行) 宮田政徳 神藤貴昭	特別第1研修室

16:00 バス発車 - 17:00 常三島キャンパス着、17:20 解散

### ■全体の流れ

オリエンテーションに続いて、参加者相互の親和を目指して「アイスブレイキング」を行い、グループ内で自己紹介をし、ゲームをした。

はじめのワークショップでは「良い授業とは」というテーマのもとに、参加者8名が2つの班(情報班、環境班)に分かれ(さらに後にミニ授業発表会では情報班はAとB、環境班はCとDになる)、あらかじめ用意された「良い授業、悪い授業」に関する学生アンケート結果から、学生からみた「良い授業」をグループ毎に分析し、その結果をパワーポイントを使ってまとめて、各グループ5分程度で発表した。

続いて実践センター教員の講師から「講義の仕方・話し方・展開の仕方」及び「授業の計画から実施まで」という講義を受けた。その後の各グループ別ワークショップはこの講義を基に、ミニ授業に向けて「シラバス・授業計画書・授業教材作成」を行った。

2日目の午前中に京都大学高等教育研究開発推進センターの大山泰宏先生より「学生を理解するとは」という特別講演をして頂いた。その内容は心理学的立場からどのように学生を理解したらよいかを示されたが、最後に学生を理解しようとする事は重要であるが、「多様化する学生を完全に理解することは不可能である」という結論であった。

2日目は午前と午後に分かれてミニ授業発表会が行われた。今年度からは授業内容を「情報」に

関するものと「環境」に関するものという2つに限定し、参加者8名に自分の専門領域と「情報」又は「環境」に関わる授業題目で全員にミニ授業を15分間発表してもらい、それに対する検討、討議を行った。

### c. 成果と課題

#### ■プログラムの到達目標に対する達成度について [到達目標①：徳島大学の全学FD活動の理念と活動計画を理解する]

基礎プログラムと同じ会場で、同時並行して各学部のFD企画・実施担当者による「FDリーダーワークショップ」が行われ、そこでは徳島大学の「全学FD活動の理念」と各学部の「FD企画の立案と実施」が話し合われた。また今年度から新たに学務系事務職員7名の事務職員研修(SD)が行われ、「学務系事務職員の現状と課題」、「教員との連携」についてのワークショップが行われた。この3者は2日間のプログラムの中で、お互いに1度だけ交流することができた。基礎プログラムの中では「FDリーダー及びSDとの共有」という時間である。2日目の午後FDリーダーとSDの方から10分程度のワークショップ内容の発表があった。そこから、現在のFDリーダー側からは徳島大学のFD活動の理念、現状、課題、今後の活動計画等が発表され、SD側からは学務系事務職員の現状と課題等が発表され、それに対する質疑応答が行われた。このFDリーダー・SDとの交流で基礎プログラム参加者も徳島大学全体の

FD活動と自分が所属する学部のFD活動が十分理解できたと思われる。

**【到達目標②：授業を計画し、実施し、評価する方法を体得する】**

授業担当者は、授業という教育活動が「目標設定、目標実現のためのシラバスと教材の作成、授業実施、授業評価」から成る一連の流れによって構成されていることを意識し、さらに、これらのことを実際に実施できる力をつけることが重要である。「FD基礎プログラム」は、講義とワークショップ及び模擬授業発表によってこの目標を達成しようとするものであり、今年度も、プログラムのこのような意義と目標が、昨年度と同様に良く理解されていた。実施5年目となり全学FDのプログラムが学内的にかなり周知、認知されてきたものと考えられる。

会場については、今年度は全体発表のための部屋とともに、参加者が少数だったこともあり、グループ数だけワークショップを行う研修室が確保でき、参加者はグループごとの準備をスムーズに行えた。また、プログラム全体の進行もFDマネージャーを初めとする事務職員の協力のおかげで支障なく行えた。グループワークにとって、グループごとに独立した部屋を確保することは重要である。

**【到達目標③：授業研究の仕方を理解し、実践できるようにする】**

プログラムの最後に、各グループがワークショップを通じて作成した授業を発表し、その発表をめぐって授業研究会を行った。前年度と同じく、授業研究会は次のような手順で行った。

1. 授業発表グループのメンバーによる授業内容の紹介
2. 模擬授業（ミニ授業）の形で授業発表グループの授業発表者による授業
3. 発表グループ以外のグループ代表（コメンテーター）による模擬授業に対するコメント
4. 全体討議

ほとんどの参加者は、この模擬授業によっては

じめて「授業研究会」なるものを経験したと考えられる。従って、授業研究会の手続きを知り、その手続きに従って実際に授業研究会を行ったことには大いなる意義がある。このような経験によってはじめて自分の授業を対象化し、意識化できるからである。

ここでの、模擬授業による授業研究会は、9月から12月にかけて実施された「授業コンサルテーション」に引き継がれ、基礎プログラム参加者がカリキュラムの中で実際に行う自分の授業について、授業検討会が行なわれた。このような展開を通じて授業そのものの改善を図るとともに、「授業研究」についての認識と実施方法を、一層確かなものとして身に付けることが出来るようになった。

**【到達目標④：FDの共同実践者として仲間づくりができる】**

今年度のプログラムの参加者8名は総合科学部、工学部、医学部、薬学部から参加していたが、2つの各グループは各学部の枠を越えた構成だったので、ワークショップを通じて学部を越えた横のつながりができ、交流を深めることが出来た。さらに初日の夜の交流会では基礎プログラム参加者は、各学部のFDリーダーや各学部の学務系事務職員と交流し、今後FDの共同実践者としての仲間づくりが大いに達成できたと思われる。

**■計画から実施までの経過と改善について**

授業技術に関する講義とワークショップ及び授業発表などの実践の組み合わせはプログラムとして有意義だったと思われる。また、今年度から前年度参加者からの要望に応じて、ミニ授業のテーマを昨年度までの一般的なテーマではなく、「情報」と「環境」に絞り、この2つから参加者が自分の専門領域に最も関わる方のテーマを選べるように設定した。その結果自分の専門領域と学際的に関わるミニ授業ができ、概ね好評であった。もっと事前に準備しておきたかったという意見が多かったほどである。

今年度はノートパソコン、液晶プロジェクター、OHP、スキャナー、コピー機等の機器及び文具を十分用意して、テーブルに配置し、自由に使用できるようにした。参加者もほとんど各自のノートパソコンを持参してプレゼンテーションに使用し、シラバスや授業計画書もワープロ作成されていた。教材作成のためのインターネット環境に関しては、現在の会場ではLANケーブルの接続ができず、これは今年度も叶わなかった。ただ「淡路青少年交流の家」の事務室で1台だけ借りられるようであった。また、会場は前年度と同じであったが、食事、作業環境、自然環境など、昨年度と同様に参加者には概ね好評だったと思われる。

#### ■来年度のFD基礎プログラムに向けての課題

模擬授業のテーマについては前年度の参加者へのアンケート調査で示された「自分たちの専門外の分野のミニ授業を作り上げるのは難しかった」という意見をとりあげ決定したので良かったが、来年度もこの「情報」と「環境」の2テーマで行うのかは検討する必要があると思われる。また、「ミニ授業は前もってもっと早くテーマを連絡してもらえば、もっと教材の工夫ができたのに」という意見があるので、来年度は模擬授業のテーマをいつ、どのように設定するかが課題になると思われる。

また前年度のアンケートの中の意見の「このプログラムは内容的に参加者が受動的なスタイルになっているので、部分的にでも参加者のリクエストに沿った講演、ワークショップ(講義に活用できるWeb作成講座、学生との上手な交流の仕方講座、効果的なパワーポイントの裏技講座、等)があってもいいのではないか」に関しては未だ解決策が講じられていないので、来年度の基礎プログラムではもう少し即戦力として役立つ実践的な内容を検討することも引き続き必要だろうと思われる。

#### d. FD基礎プログラム 2006 アンケート集計結果

##### (1) 今回のFDプログラムの内容について

- ・とても勉強になりました。
  - ・密度が高く大変ではあるが、為になりました。
  - ・確かにうわさにあったように忙しいプログラムでしたが、多くの先生のお話を伺えて、自分の足りない所に気づき、ためになりました。
  - ・授業の具体的なテクニックなどについて、大変参考になりました。スケジュールがちょっと過密気味です。
  - ・時間がタイトであった。
  - ・“環境”というテーマが日常業務とやや離れておりましたので、難しく感じました。
  - ・少し過密すぎです。内容は全て必要と思われませんが・・・
  - ・非常に密度が高く、やりがいがあった
- (2) 今回のプログラムの運営について
- ・よく出来たプログラムと思われれます。
  - ・やや時間が密すぎるのではないのでしょうか？模擬授業の準備は大学で行ってきて、こちらの会場では班員同士相互チェックと練習にあてるべきだと思います。
  - ・スムーズに運営できていました。ありがとうございました。
  - ・よかったです。お疲れ様でした。
  - ・他の人の授業をこれほど続けて聞きましたのは久しぶりでしたので、勉強になりました。
  - ・非常に参加して不満はありません。お世話になりました。
  - ・ごくろうさまでした。
- (3) 今回のプログラムの会場について
- ・周りに自然が多くよかったです。
  - ・清潔で良いと思います。
  - ・雰囲気の良い施設でした。
  - ・インターネットがつながる環境であればよかったです。
  - ・良かったです。
  - ・インターネットの接続環境が欲しい。
  - ・プレゼンテーションを作成する際の資料が乏しい。(自分の準備不足ですが)
  - ・食事の時間がもう少し長ければよりよいと思

います。

(4) その他お気づきの点があればご記入ください

- ・リーダー、基礎、スタッフ相互の交流をより促進する機会をもう少し設けて頂けたらと思います。
- ・できれば懇親会の際の余興のときは、ビールやお酒を飲みながらということにしてほしい。余興をする方が、かなり緊張してしまいます。
- ・ミニ授業は、会場に着いてからでは遅いので、事前の準備が重要ということが痛感されました。
- ・是非、インターネットがつけられる環境にして下さい。(講義の情報収集のため)
- ・ありがとうございます。

(5) 今回のプログラムに参加して、教育への関心が高くなりましたか?

(該当する枠をチェックしてください)

yes- 8 no- 0

### 3. FDリーダーワークショップ

#### a. ねらい

全学FD推進プログラム第2期の2年目である今年、リーダーワークショップでは、到達目標、内容、対象者等昨年度から開始したプログラムを引き続き実施した。

対象者は、10年以上の教育経験を有し、各学部・学科でFD企画を立案・実施する立場の教員とし、FDニーズの把握から企画の立案及びプログラム評価の方法までを、レクチャーとワークショップを通じて体得し、FD企画の立案能力を向上させることを目標とし、プログラムはFD中四国ネットワークで開発したFDファシリテーター養成プログラムを引き続き使用した。従前以上に、明確な目標を設定し、実践的内容をもったプログラムを実施した。

当日は、愛媛大学教育開発センターの佐藤浩章先生をファシリテーターとしてプログラムを実施した。

#### b. 概要

##### ■開催期日

2006年6月10日(土)～6月11日(日)

##### ■会場

独立行政法人「国立淡路青少年交流の家」  
(兵庫県南あわじ市阿万塩屋町757-39)

##### ■対象者

参加者は各学部推薦による下記教員である。

氏名	所属	職名
川上 博		副学長
三好 徳和	総合科学部	教授
近藤 正	医学部	教授
三笠 洋明	医学部	講師
赤池 雅史	医学部	講師
石丸 直澄	歯学部	助教授
木戸 淳一	歯学部	助教授
伊藤 孝司	薬学部	教授
徳村 彰	薬学部	助教授
今井 仁司	工学部	教授
岡本 邦也	工学部	講師

#### 学外講師

氏名	所属
佐藤 浩章	愛媛大学
大山 泰宏	京都大学

##### ■運営メンバー

佐藤浩章先生(愛媛大学)と曾田紘二(徳島大学)の2名で運営した。

##### ■内容

2日間にわたって次のプログラムを実施した。

第1日(2006年6月10日・土曜日)

9:30 国立淡路青年の家に到着・記念写真撮影

時刻	内容	講師・担当者
9:30-10:00	・鍵の受け渡し、部屋の確認	
10:00-10:30	(1)オリエンテーション ・徳島大学とFDへの期待、新任教員への期待 ・研修のねらいと意義 ・進め方とスタッフ紹介	副学長(教育担当) 川上 博 大学開放実践センター長 曾田紘二 (進行) 宮田政徳 神藤貴昭
10:30-11:00	(2)アイスブレーキング	曾田紘二
11:00-11:50	(3) FD企画の立案と実施I「ニーズの把握」	佐藤浩章
11:50-13:00	昼食(11:50-12:15) 休憩	
13:00-14:45	(4) FD企画の立案と実施II「方略の選択、方略の手順」 中間期の振り返り演習	佐藤浩章 曾田紘二
14:45-18:00	(5) FD企画の立案と実施III「情報収集の仕方と実践」 (6) FD企画の立案と実施IV「企画書・プログラムの作成」	佐藤浩章
18:00-19:00	夕食(18:30-19:00) 風呂他 (入浴時間 16:00~22:00)	
19:00-20:00	自由時間	
20:00-21:00	交流会	

22:00 消灯

第2日(2006年6月11日・日曜日)

時刻	内容	講師・担当者
7:10-7:20	朝の集い	
7:30-8:30	朝食、掃除(8:25点検・退室)	
8:30-10:00	(7) FD企画の立案と実施V「評価の仕方」	佐藤浩章
10:00-11:00	(8) FDプログラム作成の仕上げ	佐藤浩章
11:00-12:00	(9)講演「学生を「理解」するということは」 (終了後、先生への質問カード記入)	大山泰宏先生 (京都大学)
12:00-13:00	昼食(12:15-12:40) 休憩	
13:00-13:40	FD基礎プログラム・SDとの共有 大山先生からの応答10分、共有(20分発表・10分討議)	大学教育委員会
13:40-15:20	(10)演習「ミニ授業」発表会(後半)	廣渡修一 神藤貴昭



<p>15:20-15:50</p>	<p>(11)プログラムのまとめ                  ・ 修了証書授与                  ・ アンケート                  ・ おわりの言葉</p>	<p>副学長(教育担当)                  川上 博                  大学開放実践センター長                  曾田紘二                  (進行) 宮田政徳                  神藤貴昭</p>
--------------------	---	--

16:00 バス発車 - 17:00 常三島キャンパス着、17:20 解散

### c. 成果と課題

はじめに、プログラム終了直後にとった、参加者へのアンケート結果を示す。

#### (1) 今回のFDプログラムの内容について

- ・FDの基本、実施法の実践が習得できました。他学部のFDへの取り組みがわかる内容でした。全教官にFDを広める方法などを聞くことができました。
- ・佐藤先生の講義、ワークショップよかったです。
- ・期待どおりの内容であった。他大学や他学部の事情を知ることができ、有用であった。
- ・部分的には？もあつたけど大きくは良かったと思う。
- ・全学部共通の問題(共通教育、PBL、OJT)と各学部固有の問題をそれぞれとりあげて、全体で検討するようにすればもっと具体性がでると思う。
- ・FD企画の総論としての学習には役立った。
- ・時間的にタイトな構成ではあつたものの、充実したものでした。もう少し事前に作業内容を知らせていただければより内容の理解もあつたかと思ひます。
- ・充実していた。
- ・想像していた以上の良いものであつた。一日目の前半のワークショップは面白かつた。
- ・1日目は、FDの概要についての説明で、少し抽象的な気がしたが、2日目の内容は、各学部のFDの企画・立案が紹介されて非常に参考になつた。各学部のFD活動の取組は興味深かつた。
- ・FDの方法論がわかりやすかつた。学部講義・

運営に応用してみたいと思う。

#### (2) 今回のプログラムの運営について

- ・考える時間も仮定されていたので良かったです。
- ・ノートパソコンを2種類(Win、Mac)主催者側が用意すべき。
- ・良好な運びであつた。
- ・レクチャーが長めかな? ワークが少なめかな。
- ・基礎プログラムとリーダーワークショップの共通部分の位置づけがやや不明確だつた。もう少し全体のディスカッションをいれてもよいのではないか。
- ・最後に全員の簡単なふりかえり(30秒スピーチetc)を行つた方がよい。
- ・よく吟味されていて申し分ありません。
- ・円滑に行われていたと思う。
- ・85点
- ・よかつたと思ひます。
- ・2日目のFDリーダーワークショップと基礎プログラムの(相互)内容に関する情報をもつ少し相互に与えてもらった方がよい。

#### (3) 今回のプログラムの会場について

- ・good
- ・ざこねがつらい。
- ・不都合な点は感じなかつた。
- ・広いのに寝る時は個室でないのが、たいへんつらかつた。
- ・本音をいえば、本務(日常業務)にできるだけ影響を与えないようにするため、開放実践センターで行い、夜は自宅に帰るようにしてほしいが…。(気分転換にならずよくないのでしょうね)

- ・他の研修者もいて適度につまらず良かったと思われま
  - ・施設OK、食事OK
  - ・80点くらいはつけられるが、ワークショップ形の机があればさらに better と思う。
  - ・適当であったと思います。
  - ・宿泊施設を使わなくても良いと思う。
- (4)その他お気づきの点があればご記入ください
- ・プログラムで実際に作成する課題を前もって強調して頂ければ幸いです。
  - ・多くの教官がFDの必要性を感じるためには、どのような企画を行うとよいのかに関する情報がもっと多く得られれば嬉しかったのですが。
  - ・イビキがうるさくて殆んどねむれませんでした。3~6時まで自動販売機前のソファで寝ました。個室にしてほしい。ねむいです。
  - ・大山先生のご講演が非常に参考になった。このような新しい視点からの教育の切り口をこれからも示してほしい。
  - ・“教授”は必ず受講するように義務づけてはどうでしょうか。
  - ・他学部の活動が理解できよかった。
  - ・講演よりも佐藤先生の実践の事例などをもっと教授して欲しかった。
  - ・FDの手法があれば、KJ法以外にも紹介した方がよいと思う。

(5) 今回のプログラムに参加してFDプログラム作成能力が向上したと思いますか?

yes-10 no-0

参加者へのアンケート結果に見られるとおり、プログラム、会場、運営について概ね好評であり、普段あまり経験することのない他学部の教員との交流も良い評価を得ている。

学部や学科でFDを企画する立場の参加者に対しては、所期の目的を十分に達成することができた。このプログラムのワークの中で、当該年度の学部FDプログラムを作成することが省力化につ

ながり、学部・学科FD担当者にとって有意義なワークになったと考えられる。プログラムや設備の細部についてはアンケート結果を取り入れて可能な限り手直ししなければならない。

課題としては、まず参加者の人選の問題が挙げられる。今年度も基礎プログラムその他のFDプログラム未経験者がいきなりリーダーワークショップへ参加される例があったが、各学部で対象者を人選する際に、このプログラムの趣旨をよく理解していただき、趣旨にあった人選をしていただく必要がある。

次年度に向けて最大の課題は、基礎プログラム、リーダーワークショップ、学務系事務職員研修(SD)の参加者間の交流を真に意義あるものにする事である。この点が次年度プログラム作成の際の最重要な課題であるとする。

#### 4. 授業コンサルテーション

##### a. 授業コンサルテーションの目的

徳島大学では、全学FD推進プログラムの一環として、2005年度より「授業コンサルテーション」を実施しており、2006年度においても引き続きおこなった。2006年度は対象者は8名であった。授業コンサルテーションでは、合宿形式で実施した「FD基礎プログラム」(両年度とも6月に実施)の受講者、すなわち徳島大学で新しく授業を持つ教員を主な対象にした企画である。授業コンサルテーションでは、個々の教員の実情に沿った具体的で日常的なFDをめざしている。

##### b. 授業コンサルテーションの流れ

現在のところ、昨年度と同様次のような流れで進めている。この一連の過程が、授業コンサルテーションである。

FD基礎プログラム参加者の授業への参観・VT  
R撮影・学生アンケート

↓

授業記録作成・学生アンケート整理

↓

授業研究会(発表・VTR視聴・議論)

↓

目的: 授業の把握、授業の改善、参加者間での授業技術の共有化

まず、センター教員とFDマネージャーが、各教員の授業を参観し、簡単なメモ(授業まとめ、時間経過、特筆すべき発言や出来事)をとりつつ、授業をVTRに収める。授業終了時には、学生へのアンケート(その日の授業で何を学んだかということと、授業に関する先生へのメッセージについて)を実施する。さらに時間があれば、教員に授業に関する簡単なインタビューをおこなう。

その後、VTRをもとに、センター教員が詳細な授業記録を作成し、それと平行して授業の主要部分の映像を編集し、DVDを作成する。授業記録は、時系列に沿って授業の展開過程(まとめ、何が話されているか、学生との相互作用、板書など)がわかるように作成した。DVDは授業の展開が分かるように、各まとめから数分間の映像を抽出し、合計で20分強になるようまとめた。さらに、授業より数週間後、授業記録やDVD、学生アンケート結果をもとにした「授業研究会」を開催する。そこでは、様々な部局からの参加者を交えて、授業改善の知恵を出し合ったり、また授業からいろいろなことを学び合うことをめざした。

### c. 授業研究会

授業コンサルティングの過程で重要な要素を占めるのが、授業研究会である。授業研究会は以下のような手順で進めた。所要時間は全部で1時間20分ほどである。これも昨年度と同様の手順である。

簡単な説明(授業全体のねらい/この日のねらいなど: 対象者の先生より5分)

↓

授業DVD視聴

↓

授業参観者報告・学生アンケートから読めること(大学開放実践センター教員より5~10分)

↓

授業者解説(当日の様子/授業でうまくいっている点・お困りの点など各論: 対象者の教員より5~10分)

↓

自由討論(あるいは課題討論10~15分)

徳島大学に着任した新任教員のうち、授業をもたない教員などを除き、2006年度は8名の教員に対して授業コンサルティングをおこなった。なお、授業研究会は、大学開放実践センター会議室・授業研究インテリジェントラボあるいは蔵本キャンパスの会議室でおこなった。2006年度の授業研究会は以下の通りである。

#### 第1回 7月19日

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部  
発達予防医歯学部門 本田浩仁講師  
『急性肝炎』

#### 第2回 8月29日

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部  
再生修復医歯学部門 工藤英治助教授  
『免疫組織化学の一般論』(大学院授業)

#### 第3回 9月22日

大学院ソシオテクノサイエンス研究部  
情報ソリューション部門 柘植寛講師  
『コンピュータ入門』

#### 第4回 11月21日

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部  
生体情報薬科学部門 植野哲助教授  
『基礎化学Ⅱ原子と分子』

#### 第5回 11月29日

総合科学部 自然システム学科  
西山賢一講師  
『防災のための地球科学2』

第6回 12月18日

大学院ソシオテクノサイエンス研究部  
ライフシステム部門 藪谷智規講師  
『機器分析化学』

第7回 12月18日

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部  
統合医療創生科学部門 水口博之助教授  
『薬理学3』

第8回 2月9日

大学院ソシオテクノサイエンス研究部  
工学基礎教育センター 高橋浩樹助教授  
『微分方程式2』

授業研究会では、板書、声の大きさや速さ、プリントの作成と提示、パワーポイントの作成と提示、授業の展開、学生の学力把握、学生との相互作用のあり方、学生の動機づけ、授業において、ポイントをどのように学生に伝えるか、小テストをどのようにおこなうか、学生の集中を持続させる方法、カリキュラムの問題など幅広く議論がなされた。

また、各授業が持っている特徴から、例えば以下のようなことが議論された。

- ・大学院授業における注意点
- ・1回のみ授業における学生との相互作用の方法、理解度や興味を知る方法
- ・多様な学科や高専の学生が参加する授業、学生の保持する知識や技術のばらつきが大きい授業において、いかに効果的な教育をおこなうか
- ・授業において、野外実習をどう組み入れるか  
授業研究会では大学開放実践センター教員のほか、対象教員が所属する部局等からの参加がみられた。

d. 課題

授業コンサルティングについては、日常的かつ個別的なFDを目指しているため、その長期的な効果を検討し、本プログラムの改善につなげることが不可欠である。昨年度受講者については追

跡調査をおこなっているが、本年度受講者についてもおこなう予定である。

5. FDラウンドテーブル

a. FDラウンドテーブルの目的

徳島大学では、全学FD推進プログラムの一環として、2005年度より「FDラウンドテーブル」を実施しており、2006年度においても引き続きおこなった。FDラウンドテーブルでは、大学内外から講師を招き、徳島大学教員が直面しているトピックや、FDに関わる諸問題について話題提供していただき、それをもとに参加者が気軽に話し合うという、日常的なFDをめざしている。2006年度は4回おこなった。

b. 各回の概要

第1回FDラウンドテーブル(参加者12名)

- ・話題提供者: 徳島大学高度情報化基盤センター/ 大学開放実践センター助教授 金西計英先生
- ・テーマ: 「uラーニングセンターによる授業のIT化支援」
- ・日時: 7月12日(水) 16:30~18:00
- ・場所: 授業研究インテリジェントラボ
- ・内容: 徳島大学では平成16年度に現代GPに採択され、学内のeラーニングサポートの拠点としてuラーニングセンターが設置されている。しかし、学内でのuラーニングセンターの認知度はまだまだ低いのが現状である。そこで、今回は、金西先生にeラーニングに関する全国的な状況や、徳大uラーニングセンターの取り組みについて紹介していただき、現在おこなっているITを活用した授業の現状と、その将来像について問題提起をしていただいた。参加者を交えて、徳島大学での具体的な状況についての議論がおこなわれた。

第2回FDラウンドテーブル(参加者17名)

- ・話題提供者: 徳島大学全学共通教育センター講師・松谷満先生
- ・テーマ: 「学生による授業評価にどう対応すれ

ばよいのか]

- ・日時：9月27日(水) 15:00~16:30
- ・場所：授業研究インテリジェントラボ
- ・内容：近年、ほとんどの大学で授業評価が実施される状況になったが、学生による評価が定着する一方、多くの教員はこの急激な変化に十分に対応しきれていない。今回の報告では、まず全国の授業評価の現状、徳島大学全学共通教育における授業評価の取り組み(中間アンケートなど)を振り返り、次に、徳大内外の各種資料・データをもとに、授業改善につながる授業評価のあり方について、松谷先生にお話しいただいた。その後、各学部の取組、多変量解析的な方向と自由記述方式のそれぞれの利点と欠点について、「自由記述データベース」の可能性についてなど多様な議論がおこなわれた。

#### 第3回FDラウンドテーブル(参加者15名)

- ・話題提供者：メディア教育開発センター研究開発部助教授・田口真奈先生
- ・テーマ：ハーバード大学におけるFD事情
- ・日時：11月29日(水) 16:30~18:30
- ・場所：授業研究インテリジェントラボ
- ・内容：今回は、田口先生に、客員研究員をされていたハーバード大学デレックボク教授学習センターでおこなわれているFD活動について紹介いただき、日本のFD活動との違いについて報告いただいた。日本ではみられないFDの手法、例えば、演劇の専門家によるFDプログラムなどについて紹介いただいた。さらに、これらをもとに、日本の大学におけるFDのあり方について議論がおこなわれた。

#### 第4回FDラウンドテーブル(参加者9名)

- ・話題提供者：新潟大学大学教育開発研究センター教授・津田純子先生
- ・テーマ：ドイツのFD事情
- ・日時：平成19年1月12日(金) 15:30~17:00
- ・場所：授業研究インテリジェントラボ
- ・内容：ドイツは、日本の大学教員文化に根強い

影響を与えてきた。現在、ドイツでは、「大学教授法養成教育・継続教育」(FDに相当)は、日本に比べて国際的動向と連動しながら展開されている。他方、日本では国際的指導理念が軽視されがちなまま、FDがおこなわれており、FDの理念については国際的に位置づけがなされてこなかったと言える。そこで、今回は、津田先生に、ドイツのFDの状況、特にその指導理念についてお話いただいた。

#### c. 課題

FDラウンドテーブルについては、昨年度は「よい期末試験を作成するには」「授業をどう始めるか」「学期途中の評価をどうするか」「はじめよう、eラーニングの授業～目的に合ったLMSの選択とウェブ教材の作成～」といった実践的なテーマであった。今年度は実践的な内容に加え、アメリカやドイツのFD事情についてのテーマ設定をおこなった。これらは、諸外国の事情から学ぶことによって、自大学の実践の改善へのヒントを得るという意図のもとおこなったが、それがどのような効果をもたらしたか検討する必要がある。また、FDラウンドテーブルのテーマとして、今後どのようなものが求められるのか、調査する必要もあろう。

## 6. 教育カンファレンス

### a. 概要と成果

第2期全学FD推進プログラムの年間計画の最後を飾るプログラムが、徳島大学教育カンファレンスである。最近一年間に、実践を重ねてきた各部署の教育改善プロジェクトが、一堂に会して報告、討議を行うものである。昨年に引き続き開催した。各部署から口頭発表15本、ポスター発表9本、ワークショップ1本が集まった。また、京都大学高等教育研究開発推進センター大塚雄作教授による講演「大学評価と教育活動—授業改善と成果主義の狭間で」を行った。(参加者約70名。)



